



一陽来復

教職員の皆様には、大きな夢と新たな決意を胸に良き年をお迎えになられたこと、心よりお慶び申し上げます。

さて、多くの命とふるさとの穏やかな暮らしを奪い去った大震災の爪痕が未だ深く刻まれたまま、我が国は、新しい年を迎えることとなりました。自然界は、未曾有の大震災を通じて、経済性、効率性を追い求めすぎた戦後の人間社会に大きな警鐘を与えました。自然との共生を生活に織り込んできた私たちの社会が、その本来の姿を取り戻すためには何が必要なのでしょう。

私たちを取り巻く時代の潮流は激しく、高度に情報化したグローバル社会の進展の中で、これまで誰一人として経験したことのない人口減少社会、超少子高齢化社会に突入しました。今、我が国は、政治、経済、文化、社会のあらゆる領域において、大胆な意識改革と行動変革を余儀なくされています。

こうした中、私たちが、戦後教育の改革の旗印でもある“教育立市宣言”の下で進めている大阪初のコミュニティ・スクール制度の導入や市版小中一貫教育＝つながりアップ事業、府内トップレベルを誇るICT環境の整備、さらには、市民大学＝くろまる塾や今年度立ち上げ予定の子ども版くろまるキッズ塾等々は、ゆるやかな紐帯を市内全域に張り巡らせる仕掛けと言えます。

“つながりの中で子どもを育てる！”

これは、単に子どもたちの教育だけをねらいにしているわけではありません。

生涯学習社会の構築の中で、学びを生かすサイクルに学校教育を位置づけ、“つながりの中で子どもを育てる”営みを通じて、学校が抱え込みすぎた教育機能を、本来あるべき家庭や地域との協働の姿に戻すことが必要です。これが、今、本市が進めている教育改革の底流に流れる重要なねらいなのです。先生方に与えられている限られた指導時間を、少しでも多く、子ども達の教育のために割り振ることが、この時代を生きる私たちに課せられた役割であり、それが、ひいては、子ども達の学力水準の向上につながるものと言えます。そして同時に、この子どもたちを中心に据えた“つながり”による取組は、戦後の高度成長期の負の遺産として生起している“人々の孤立”への手当てであることも理解いただきたいと思います。

教職員の皆様方には、現在の本市教育の潮流の中で、これらの教育的理念を共有いただき、それぞれの役割を再認識いただきたいと思います。

教育は流れる水に文字を書く如く果てしのない営みであり、岩に文字を刻むかのようなプロとしての教育者の姿勢が求められます。

『凡庸な教師は、ただしゃべるだけ！少しましな教師は、理解させようと努める！優れた教師は、自らやって見せる！そして、さらに優れた教師は、心に火を点す！』

これは英国の教育哲学者、アーサー・ウィリアム・ワードの言葉ですが、今、本市が取り組みを進めている教育改革の成否の鍵を握っているのは、皆様お一人お一人です。そして、それぞれが持つ強みを結集させた学校組織だと言えます。教育は、一瞬一瞬が勝負なのです。その一瞬に持てるエネルギーのすべてを注いでいただきたい。それが、学校が担うべき役割であり、子どもの人生の財産になる生き抜く知恵を身につけさせることにつながるものです。教育専門職としての「授業力」を向上させるために一層の研鑽を積み重ね、「子どもの心に火を点す」教育実践に心血を注がれることを心からお願い申し上げます。

平成壬辰24年 正月
河内長野市教育委員会 教育長 和田 栄



くろまるくん